



経済危機の構図 (8)

日専連名誉講師 富山短期大学名誉教授 川中清司

昭和恐慌に挑んだ先人に学ぶ

社会や経済を改革するのは簡単ではない。世論と戦い、自分自身と戦わなければならない。そんな中、暗殺の危険を恐れず、敢然として突き進んでいった人たちがいた。

昭和と大恐慌に際して、浜口雄幸首相と井上準之助蔵相は、金解禁の断行に国運を託した。しかし、結果は失敗に終わった。これに対し高橋是清蔵相は、積極財政と輸出の拡大で不況を突破した。だが、いずれも凶漢の手に倒れた。

成功して讃えられるよりも、ことならず悲劇の幕を閉じた中にこそ、大事な教訓が秘められている。これらの政治家から学ぶべきものは多い。

恐慌危機と二人の蔵相

この物語は、昭和の初めに不況のどん底にあった日本を救うために命をかけた二人の大蔵大臣の話である。井上準之助は一九二九(昭和四)年、浜口雄幸首相のもとで蔵相となり、高橋是清は一九三二(昭和七)年に犬養毅首相のもとで蔵相となった。

この二人はいずれも日銀総裁を務め、外国語が堪能で国際感覚が豊かで、世界と日本の立場をよく認識していた。日本は貿易の面では欧米やアジアなど円経済圏以外に依存し、金融面ではロンドンや

国際金融市場に依存していた。世界各国の通貨は、第一次世界大戦までは金本位制を軸に進んできたが、グローバルな経済発展のなかで管理通貨制をとるべきか動揺していた。

日本の円の實力はまだ弱く、金貨と交換する金本位制を貫くか、新しい世界の流れに沿って管理通貨制に踏み込むのか、大きな選択の岐路に立たされていた。

結論として昭和恐慌という重圧な政局のなかで、井上は金解禁を断行して国際的信用を回復しようとした。一方、高橋は正反対の管理通貨制度へと踏み切り、輸出拡大と積極財政に踏み切った。

昭和恐慌の打開策

大正末期から昭和にかけて、日本は大きな不況に遭遇していた。第一次大戦後の戦後不況、関東大震災後の震災不況、昭和四年以降の世界恐慌……。次々と襲う不況の嵐に、倒産と失業者が増え、市民の生活苦は増し、社会不安は一層高まった。金輸出禁止下の日本は、経済界の体質改善が進まず、工業の国際競争力も回復せず、貿易は輸入超過で為替相場の動揺と下落に苦しんでいた。

金融や貿易業からは、金解禁を行って安定化を望む声が高まり、手形交換所や東京商工会議所から「金解禁即時断行決議」が政府に突きつけられた。一九二八年にフランスが金解禁を行って、主要国で行わないのは日本だけとなり、国際的な非難を受けた。しかし実際には、各国とも正貨不足のためデフレを招き、不況に追い込まれていた。

一方、金解禁を実施するにあたって、その価値をいくらにすべきか、諸外国のように平価切り下げを行うべきとの意見もあった。鉄鋼業など重工業では、デフレと

外国製品の輸入価格の下落を恐れて金解禁に反対する声も強く、不況のさなかでの金解禁は、「嵐に向かつて雨戸を開け放つもの」との批判も多かった。

金解禁に命をかけた 浜口首相と井上蔵相

一九二九（昭和四）年七月、首相となった浜口雄幸は盟友・井上準之介を大蔵大臣に委嘱し、翌年一月に金解禁を断行した。金解禁とは、金貨や金地金の輸出入を解禁して、本来の金本位制に復帰することである。閉塞状態から脱出するには金解禁に踏み切り、再び世界経済の輪に戻すしかないという大決断であった。

- ・ 具体的には、次のような効果を狙った政策である。
- ・ 金解禁で通貨価値を回復させ、為替相場の安定を図る。
- ・ 金本位制の持つ自動調整作用で日本経済のリズム化を実現させる。

その結果、物価は安定し、産業合理化が進む。さらに国際競争力が強化され、本来の好景気が訪れる。

そのためには、あえて一時的な不況を覚悟して、緊縮財政とデフ

世界恐慌以降の日本経済の状況

	1929年	1931年	1933年
卸売価格	100	76.6	69.2
鉱工業生産高	100	68.1	63.9
輸出額	100	46.1	24.8
輸入額	100	48.1	25.8
失業率	2%	17%	28%

（暦年の指数 1929年=100）近代日本経済史要覧から

レ政策を實行しなければならぬ。現在ならば金本位制は時代に逆行した政策といえようが、当時はこれが唯一の打開策と信じて、命をかけて推し進めたのだった。

浜口首相と井上蔵相の性格は対象的だった。浜口は口数が少なく頑固で正義感が強く、風貌からもライオン宰相と呼ばれていた。強烈な印象がかえって大衆からも親しまれた。井上は多弁で行動的、日銀出身でスタイリストでゴルフもやる。静の浜口、動の井上と言われ、異なる性格の二人だったが、金解禁を目ざす共通の目的に燃えていた。その政策信条のもとで深

い友情が培われていた。

■金本位から管理通貨へ 通貨と金の交換を認める金本位

制度が日本に導入されたのは、一八七一（明治四）年で、当時は金貨が不足し銀貨が鑄造された。実際の本位制は明治三〇年で、金〇・七五グラムで一円だった。当時、世界の主要国ほとんどは金本位制をとり、兌換紙幣で自由に金と交換することができた。

一九一四（大正三）年、第一次世界大戦が勃発し、各国は金の国外流出を防ぐため、金輸出の禁止政策をとった。日本も寺内正毅内閣が一九一七（大正六）年に許可制に踏み切り、事実上の金輸出禁止に入った。これは戦時中の一時的な措置であって、終戦で解除されるべき性質のものだった。

世界大戦後、主要国はアメリカを先頭に金本位制に復帰したが、日本は一九二〇年代の不況で復帰のチャンスがつかめず、金本位制から離脱した状態を続けていた。

■世界恐慌と日本経済の失速

一九二九年一〇月、突然、アメリカに恐慌が起こった。ニューヨークのウォール街株式市場で株価が暴落し、繁栄に酔っていた市民は途端に不況のどん底に突き落

とされた。恐慌は全世界に広がった。日本は予想を超える昭和恐慌に陥った。

大量の金が流出して物価下落（デフレ）が深刻化するなど、日本経済は破滅的な打撃を受けた。さらに緊縮予算が不況対策の足かせとなり、ますます不況を深刻なものにした。輸出が急激に減少し、企業の操業が短縮し、倒産、失業者が激増した。ちなみに一九二九年から四年間で鉱工業生産高は約三〇パーセント、輸出入額は約七五パーセントも減り、失業率は二八パーセントに達した。

まゆの価格が暴落し、米価などが下がり地方経済は不況に陥った。農村も深刻な恐慌状態となり、特に東北地方では欠食児童や女子の身売りが相次いで起こるなど、社会不安が増大した。

この中で浜口内閣は、中国との関係改善を図ると同時に、ロンドン軍縮条約に調印した。

軍艦建造の要求が満たされなかったため、軍の統帥権を犯すものだと軍部から激しい攻撃を受けた。こうした批判の高まりが軍部独走の道を開きつつあけとなった。

■国家主義と政局の危機

恐慌で国民の不安が高まり、統



井上準之介

- ・1869（明治2）年、大分県日田の造り酒屋に生まれる。
- ・横浜銀行頭取、日銀総裁、大蔵大臣を務め、第一次世界大戦後の財界の動揺に対処。
- ・1923（大正12年）関東大震災直後に大蔵大臣に就任。支払猶予令で30日間のモラトリアム（支払猶予）を実施、経済救済に尽力。
- ・1927（昭和2）年の金融恐慌時に日銀総裁となり、高橋是清蔵相と共に事態の收拾を図る。
- ・1929（昭和4）年、浜口内閣で大蔵大臣に就任し翌年、金解禁を実施して経済回復を図るが、かえって不況が深刻となる。
- ・1932（昭和7）年、右翼団体の凶弾に倒れた。

帥権干犯問題や満州事変などに刺
激されて、軍人や国家主義勢力に
よる国家改造運動が急激に勢力を
増していった。クーデターや暗殺
など、血なまぐさい事件が続発す
る社会危機にあった。

一九三〇（昭和五）年一月一
四日、浜口は右翼青年によって東
京駅で狙撃され重傷を負う。東大
病院に担ぎ込まれ、手術によって
一命をとりとめた。その時たった
一言、「男子の本懐だ」と告げた
という。

翌三一年三月一〇日、国会が紛
糾し、骨に銃弾を残したまま登院
し質疑に応じた。四月、若槻礼次
郎に後を託して内閣総辞職。八月
二六日、病状が悪化し、帰らぬ人
となり、浜口政策は挫折した。

若槻内閣のもとで九月一八日に
満州事変の勃発という不測の事態
が発生した。直後にイギリスが金
本位制から離脱した。経済界では
「近く日本は再び金輸出を禁止し、
円相場は暴落する」という観測が
強まった。三井をはじめとする財

閥は、円を売ってドルを買い込み、
金輸出再禁止の後にドルを売って
膨大な為替差益を手にした。この
ため財閥や政党の行為に対する非
難が高まった。

この年、三月事件、十月事件な
どのクーデター事件が起きた。陸
軍青年将校が組織した桜会が中心
となり、政党内閣を打倒して軍事
内閣を目ざした。若槻礼次郎内閣
は総辞職し、犬養毅内閣となった。

高橋蔵相の積極政策

一九三一（昭和六）年一二月、
犬養毅が総理大臣となり、蔵相に
高橋是清が就任して積極政策を打
ち出した。その柱は、「管理通貨
制度への移行」と「輸出拡大」と
「財政支出の拡大」の三つであった。

組閣当日に金輸出再禁止を断行
した。円の兌換を停止し、金融シ
ステムは、通貨供給量を政府・日
本銀行が調整する管理通貨制度に
移行した。この制度は通貨の発行
量を正貨準備によって調整しない
で、通貨当局（中央銀行）の裁量
で管理・調整するものだ。この年
に日本はイギリスの金本位制から
離脱し、アメリカを除く各国もこ
れに追従したので、時代は管理通

貨制度へと進んだ。
円為替相場が暴落したが放置し、
意図的な低為替政策をとった。結
果として輸出は大幅に拡大された。
綿織物の輸出はソーシャルダンピ
ングと非難されるほど伸びて世界
一位となった。一九三二年一月に
起きた満州事変で軍事費を増やし、
農村救済費の支出を増やすなど積
極財政を推し進め、意図的なイン
フレ政策をとった。重化学工業部
門でも急成長を遂げ、いわゆるコ
ンツェルン（新興財閥）が形成さ
れ、鉄鋼業では大合併によって日
本製鉄会社が誕生し、鋼材の自給
体制が確立された。日本経済は、
こうして恐慌から脱出した。

一九三二年二月、井上は選挙演
説会場で狙撃され、帰らぬ人と
なった。「一人一殺」を唱える血
盟団による犯行だった。同三月に
は三井合名会社理事長の団琢磨が
相次いで暗殺された。

一九三二年五月一五日、犬養首
相が海軍の青年将校によって首相
官邸で暗殺された。いわゆる五・
一五事件である。「話せば分かる
じゃないか」と説きかける首相に、
「問答いらぬ。撃て撃て」と凶弾
が貫いた。首相は最後まで「話せ
ば分かる」と言いながら息絶えた。



高橋是清

- ・1854(嘉永7)年、幕府の御用絵師の子として生まれる。
- ・海外留学中に奴隷生活を味わう。帰国して教壇に立ち、教え子に正岡子規や秋山真之(海軍中将)がいる。
- ・大正年間に第20代の総理大臣となり、大蔵大臣、日銀総裁などを務めた。日露戦争期に欧米市場で外債発行の交渉をまとめた。
- ・昭和恐慌では、井上準之介日銀総裁と協力し、モラトリアム(支払猶予)を断行し事態の収拾にあたる。
- ・岡田内閣で8度目の大蔵大臣となったが、1936(昭和11)年、2.26事件で陸軍青年将校に暗殺された。

■二・二六事件 高橋蔵相暗殺
 後継内閣は斎藤実首相のもとで高橋蔵相が統投した。高橋財政の後半の課題はインフレの急進を抑えることであり、軍事費を抑制し、財政の健全化を図らなければならなかった。一九三四(昭和九)年七月、岡田啓介海軍大将が総理大臣となった。このころ軍部の勢力が増大し、皇道派と統制派の派閥抗争が激化した。一方では憲法学者の美濃部達吉が唱えた天皇機関説に対して、国体に反する思想と

して激しい排撃運動が起り、皇道派青年将校や国家主義者がその先頭に立った。一九三六(昭和一一)年二月二六日、皇道派青年将校らが約一四〇〇名の兵を率いて蜂起した。首相官邸・警視庁を襲撃し、高橋是清蔵相が射殺された。斎藤実内大臣、渡辺錠太郎陸軍教育総監も婦らぬ人となった。世に言う二・二六事件である。岡田啓介総理は従兄弟の松尾伝蔵大佐が身代わりとなつて奇跡的に助かった。

昭和恐慌から戦争へ

事 件	政治・経済情勢	内閣・政策
★第1次世界大戦 1914～1918	・大戦後の不況—1920年代	山本権兵衛内閣 1923.9
★関東大震災 1923.9	・震災年形 ・モラトリアム	・戒厳令 浜口内閣・井上蔵相 1929.7～1931.4
世界大恐慌 1929 ☆浜口首相狙撃 1930.11	金融恐慌 1927 昭和恐慌 →農村恐慌へ拡大	・金解禁(金本位制) ・不況脱出政策成らず 若槻内閣 1931.4
満州事変 1931.9	・英国金本位制を停止 ・日本財閥:円売りドル買い →巨額の為替差益を獲得	犬養毅内閣・高橋蔵相 1931.12～1932.5
・テロ事件(血盟団事件) 1932.2 ☆井上元蔵相暗殺		斉藤実内閣・高橋蔵相 1932.5～1934.7
・五・一五事件 1932.5 ☆犬養首相暗殺		岡田啓介内閣・高橋蔵相 1934.7～1936.3
・二・二六事件 1936.2 ☆高橋蔵相暗殺	戦時体制へ移行 ・軍部の発言権強まる ・財政の膨脹	前半・輸出の拡大 ・財政支出拡大 (積極財政)
日中戦争 1937	・戦時体制 ・統制経済	後半・インフレ抑制
★第2次世界大戦 1939		近衛内閣 1940
★太平洋戦争 1941～45	・戦局悪化・本土空襲・敗戦	東条内閣 1941

こうして高橋政策はつぶされ、以後、軍部の発言権が急速に強まって軍事費は膨張した。政党内閣は終わりを告げ、日本は無謀な戦争の道をたどることとなる。

■社会改革に命をかけた人間
 大正から昭和にかけて社会経済の危機に立ち向かった二人の大蔵大臣と政治家の姿を振り返った。時代の先見性を持ち、どんな困難に遭遇しても敢然と立ち向かう強

固な信念を持ち、ひたすら掲げる目標に向かって突き進んでいった。世のため人のために尽くす献身性に燃え、常に死を覚悟していた。西郷隆盛が言った。「命を惜しまぬ者ほど始末に困るものはない。されどそういう者でなくては、世の中の大事は成し遂げられぬ」。まさにその通りの人物だった。今どきの政治家と比較して隔絶の感がある。